

幼稚園における幼児の人間関係の把握の試み

An attempt to visualize interpersonal relationships of preschoolers in kindergarten

植 村 善太郎

Zentaro UEMURA

福岡教育大学 学校教育ユニット

(令和2年9月30日受付, 令和2年12月10日受理)

Abstract

Children's interpersonal relationships are known to have an important function in their upbringing. In order to support children's upbringing, it is important to understand the state of interpersonal relationships of children. In this pilot study, I attempted to develop a method for understanding young children's human relationships as easily as possible by applying the methods of sociometric testing. Based on the teacher's nomination of co-actors of children, a sociogram was made. And it was relatively easy to visualize the human relations in the class. The applicability, limitations and challenges of this method were discussed.

キーワード: 幼児, 人間関係, 幼稚園, 学級構造

Keywords: preschoolers, interpersonal relationship, kindergarten, class structure

問 題

子どもの人間関係の把握の意義

子どもの人間関係, 特に友人関係が, 子どもの発達にポジティブな影響を持つことは, 多くの人が同意するところである。例えば, 井森 (1997) は, 幼児期における遊びやけんかといった相互交渉が子どもたちの社会的能力の発達に果たす役割として, 次のようなものがあるとしている。すなわち, 1) 他者理解・共感, 2) 社会的カテゴリーの理解, 3) 社会的規則の理解, 4) コミュニケーション能力, 5) 自己統制能力である。これらは, 人間の社会生活全般で求められる重要な力であり, 小学校では2020年度からスタートしている「学習指導要領」における「生きる力」とも密接に対応した資質, 能力といえる。

その一方で, 子どもの人間関係が子どもの資質・能力に影響することを直接検討した研究は多くない。例えば, 及川 (2016) は, 集団の構成, 集団内での経験, 集団を取り巻く環境要因などが子ど

もの発達に及ぼす影響を明確にする議論よりも, 子ども個人の資質・能力が対人関係, 集団構成に及ぼす影響についての検討が優勢であると考察している。対人関係, 集団構成, そしてそこで経験されることは実際には非常に多様であり, それらの個人の発達に対する影響の検討が容易ではないことがその背景の一つにはあると推測される。測定の面から考えても, 例えば, 子どものソーシャル・スキルを測定する方法は様々なものが開発されているが (例えば, 藤枝・相川, 2001; 金山・金山・磯部・岡村・佐藤・佐藤, 2011 など), 他者との関係や集団構成を把握することは簡単ではなく, 研究の数は限られている。

冒頭に述べたように, 他者との関係が子どもの発達に大きく影響するのだとすれば, その様態を把握し, その時々の子どもを取り巻く状況についてモニタリングできることは, 子どもの育ちを支援する上で重要であろう。特に, 複数の子どもの育ちに日々向き合うことを仕事とする保育者, 教員にとって, 子どもの人間関係を把握すること

は、子どもの個性理解、そして、今後の保育内容やかかわり方を検討する上で、極めて重要な事項であると考えられる。

子どもの人間関係把握の方法

子どもの人間関係の詳細の把握は、高櫻(2007)、利根川・無藤(2011)で行われているように、長期間にわたる観察が基本的な手法である。こうした方法は現場に密着したきめの細かい把握手法といえるだろう。一方で、そうしたきめの細かい観察は、観察視点の限界から、焦点が狭くなり、全体を同時に把握することは容易ではないという課題を有している。全体的な状況を可視化し、それによって現在のクラス内の人間関係状況を明確化し、それに応じて明日からの保育内容や関わりを検討するといったことを考えると、把握の精度は粗くなったとしても、より簡便な方法も必要であると考えられる。

そこで、本研究では、ソシオメトリック・テストを応用したクラス内の人間関係把握の方法を検討することにした。ソシオメトリック・テストは、学級内の非公式な集団構造を把握する方法として多用されてきた方法である(植村, 2001)。本来、ソシオメトリック・テストは、子どもたち自身に、集団内のメンバーから、一緒にいたい人、休み時間に一緒に遊びたい人などを選択・報告させるという方法をとる。幼児を対象とした場合、文字の記述、名前の想起、他児に対する弁別的な認知など、困難が生じる可能性があるポイントがソシオメトリック・テストには多く存在する。そこで、本研究では子どもたち自身に回答させることはせず、ひとりひとりの子どもについて、普段の生活の中で、よく一緒にいる人を保育者に回答させるという方法をとることにした。この場合、得られるデータは、結局は保育者の認知の枠からは出ないという課題があるが、ひとりひとりを意識しながら回答することで、集団の構成として、あるいは仲間関係として認識していた様態とは別の姿を得ることができる可能性があると考えた。

この保育者の回答に依拠したソシオメトリック・テストのデータから、通常ソシオグラムを作成するのではなく、コンデンセーション法を適用したソシオグラムを作成することにした。コンデンセーション法とは、通常ソシオグラムを集約化、単純化し、大局構造を把握しやすくするとともに、描出を容易にするための手法である(狩野, 1985)。

最後に、この試行的な幼児の人間関係構造の把

握方法にどのような可能性と課題があるかを考察した。

方 法

対象と調査時期

日本国内のある幼稚園の3歳から5歳クラスの子ども54名について、3名のクラス担任の保育者からデータを得た。子どもの所属クラスと性別の構成は以下のようなようだった(Table 1)。

Table 1 対象幼児のクラス別の性別構成

	男児	女児	計
3歳クラス	9	11	20
4歳クラス	8	9	17
5歳クラス	8	9	17
計	25	29	54

調査は、2018年11月に実施した。

調査内容

クラスの担当保育者に、ひとりひとりの子どもについて、普段の生活の中で、頻繁に行動を共にしている子どもを5人を上限として挙げるように依頼した(Table 2)。

Table 2 共行動者についての質問項目の概要と回答例

	高い頻度で一緒にいる人の番号を記して下さい				
	A	B	C	D	C
1	2	3	4	5	
2	1	4	5		
3	1	8	10	13	14
・					
・					
・					

Table 2にもあるように、本調査では、幼稚園内の子どもひとりひとりに通し番号をつけ、保育者への質問紙においては、その番号のみで回答することを依頼した。研究者側では、個人の氏名をデータとして扱わなかった。

人権への配慮

本調査への参加は任意であり、提供されたデータが学術的に使用されることについては、あらかじめ参加者から同意が得られていた。また、データは匿名化されていると同時に、厳密に管理され、参加者のプライバシーが侵害されるリスクは低減されていた。

結 果

共行動者の人数

各子どもについて、高い頻度で一緒にいると何人の子どもがあげられたかをカウントし、集計した。基本統計量は Table 3 のようになった。

Table 3 共行動者数についての基本統計量

	平均値	SD	レンジ
3歳クラス	2.00	0.63	2
4歳クラス	3.76	0.94	3
5歳クラス	2.12	0.83	3

男女別に平均値を集計したところ、3歳児クラスでは男児 1.89 人、女児 2.09 人、4歳児クラスでは男児 3.38 人、女児 4.11 人、5歳児クラスでは男児 2.38 人、女児 1.89 人であった。人数が少ないので、学年差、男女差について統計的な検討は難しいが、4歳児クラスにおいては、共行動者数が相対的に多く回答されているといえそうである。これは、実際のクラス内の人間関係が非常に活発なことを意味するのか、回答した保育者の特質によるものなのかは、本研究のデータからは明確には出来ない。今後の課題としておきたい。

このデータを元に、ホワイトボードを使いながら、コンデンセーション法（狩野，1985）によって、ソシオグラム・コンデンセーションを作成した。

なお、狩野（1985）によるコンデンセーション法は、次のようなステップから構成されている。

仮に、A 児の共行動者として、B 児が選ばれていたとする。そして、B 児の共行動者として、A 児があがっていれば、この 2 名には相互選択が成立していると思なし、A 児と B 児とでコンポーネント、すなわちサブグループを形成しているとみなす。また、B 児と C 児との間に相互選択が成立している場合、A 児、B 児、C 児によるコンポーネントが成立しているとする（ステップ 1 および 2）。

さらに、D 児が A 児を選択し、A 児と同じコンポーネントに含まれる B 児が D 児を選択している場合、D 児を A,B,C 児によるコンポーネントに含める（ステップ 3）。

もう一段階進めると、コンポーネント間で間接的にでも相互選択関係が成立していれば、その二つのコンポーネントを一つのコンポーネントにすることも出来る（ステップ 4）。

本研究では、クラスサイズが比較的小さく、集約化と同時に下位集団構造がある程度わかる方がよいので、ステップ 2 までを適用して、コンデンセーション法を用いたソシオグラムを作成した。

3歳クラス、4歳クラス、5歳クラスは次のようになった（Figure 1-3）。

「男児（あるいは女児）コンポーネント」と書かれている丸は同性のみで構成されていることを意味する。「男児（あるいは女児）中心コンポー

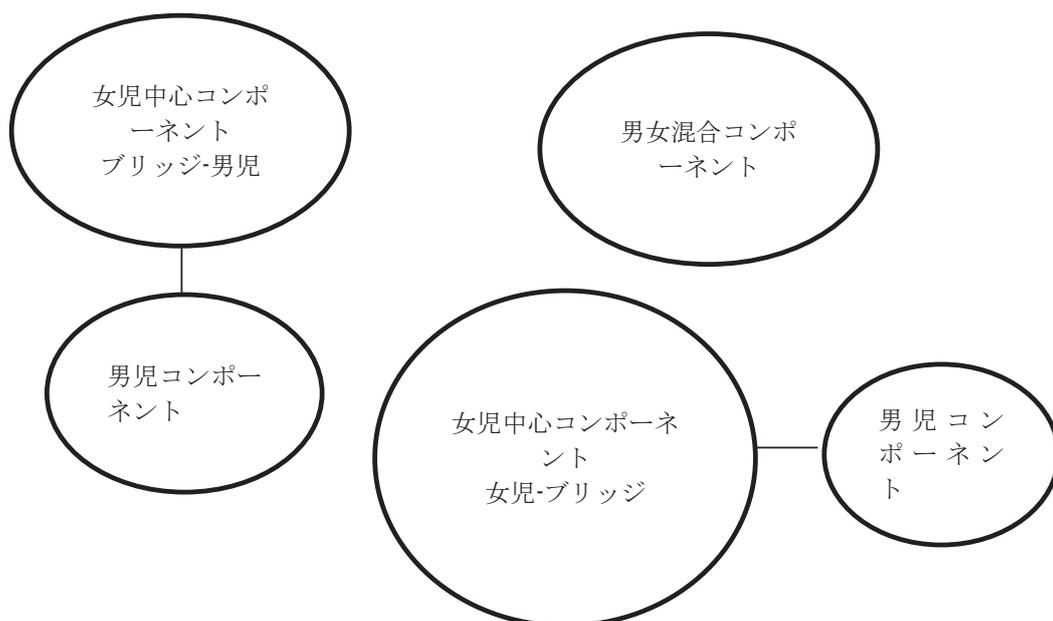


Figure 1 3歳児クラス（男児 9 名、女児 11 名）のコンデンセーション法によるソシオグラム

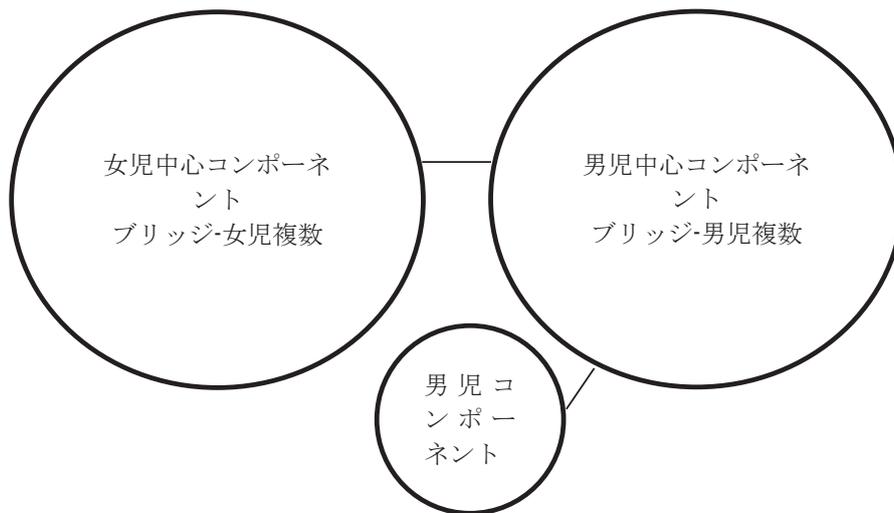


Figure 2 4歳児クラス（男児8名，女兒9名）のコンデンセーション法によるソシオグラム

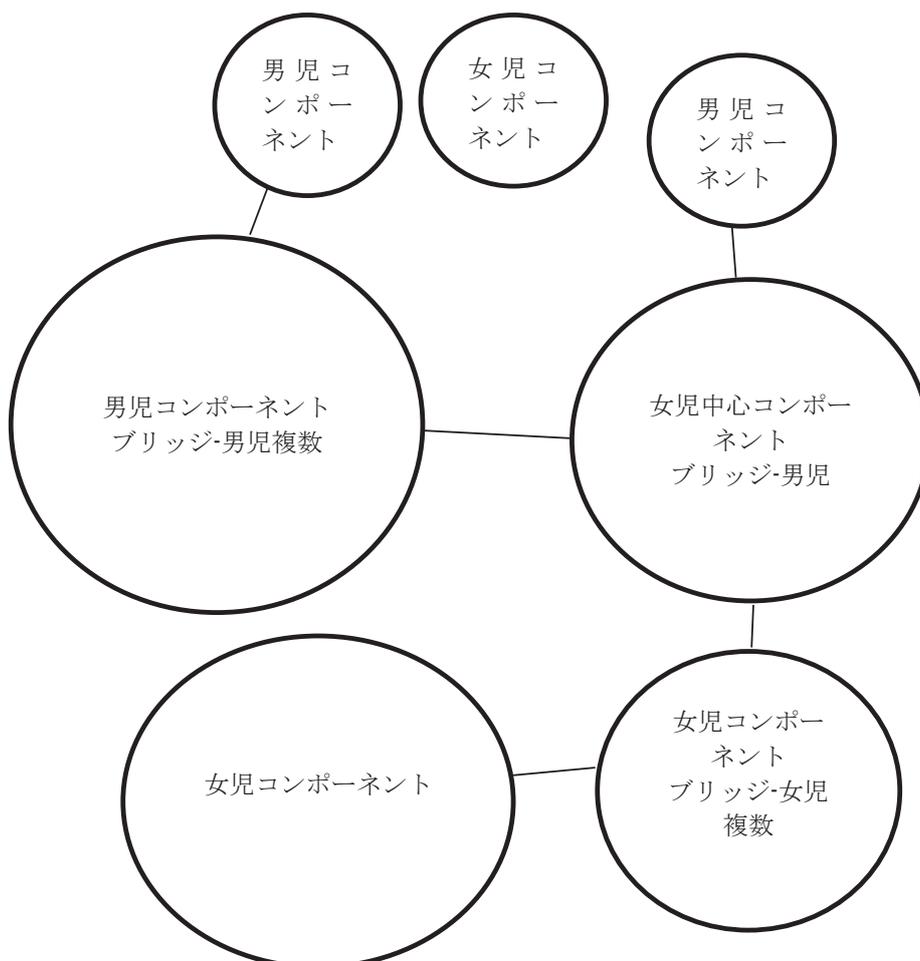


Figure 3 5歳児クラス（男児8名，女兒9名）のコンデンセーション法によるソシオグラム

ネット」は、両性によって構成されているが、一方の性のメンバーが多数派であることを意味する。「男女混合コンポーネント」は、両性によって構成されていて、人数がほぼ同数であることを意味している。それから、「ブリッジ」は、他のコンポーネントのメンバーとの選択、あるいは被選択の関係があり、関わりがコンポーネント外にも開かれているメンバーがいることを指しており、その幼児の性別を記入している。複数存在する場合は、「複数」と記した。丸のサイズは、コンポーネントに含まれている幼児の人数を大まかに示しているが、厳密ではない。

Figure 1 から 3 を見比べると、大まかには、男女で別々のコンポーネントが形成される傾向が見てとれる。3 歳クラスに男女混合コンポーネントが 1 つあるが、その他にはなく、性を一つの核にした集団が構成されているとみなしうる。

3 歳クラスは、コンポーネント間の関係が相対的に多くなく、それぞれのコンポーネントの独立性が高いように見える。幼稚園での生活が、4 歳クラス、5 歳クラスに比して短いことから、関係が局所的になりがちなのかも知れない。

4 歳クラスは、クラス全体での関わりが多く、下位集団（コンポーネント）が細分化されなかった。ブリッジになっている子どもの人数も複数であり、全体としての関わりが多いことが読み取れる。

5 歳クラスは、コンポーネント間の関係性が多く出現しており、人間関係のネットワークが複雑化していることが見てとれる。それぞれの居場所がありつつも、他のコンポーネントとの関わりも多く確認されており、複雑な社会関係が生まれていると推測される。

ブリッジになっている子どもは、集団間のつながりを産んでいる一種のキーパーソンとみなすことが出来る。保育での活動を構想するにおいては、こうしたコンポーネントをどう生かすか、そして、ブリッジになっている子どもにどんな役割を期待するかといったことをこうした図から考えることができるかも知れない。

考 察

保育者によるソシオメトリックテスト・データを使った人間関係の把握

本研究では、ソシオメトリックテスト、そして、その結果の集約方法としてのコンデンセーション法を応用して、保育者評定による共行動者

の指名データ（実際には、指名ではなく ID 番号を用いた）を元に、クラス内の全体的な人間関係を大雑把にはあるが、把握することを試みた。

今回のデータからは、各学年（クラス）の特徴を読み取ることが、ある程度出来たように評価される。この方法の強みは、比較的簡便に、保育者自身でその時のクラスの人間関係の状況を可視化できる点にある。関係の質や、そこで経験されている内容といった詳細はこのデータのみからではわからないし、そもそもが、保育者の認知のみに頼っているという限界もある。しかし、現時点で、クラス内の状況がどうなっているかを可視化することは、明日以降の保育を考える上では、一つの手がかりとなるであろう。

クラス内で、他の集団との関係が乏しいコンポーネントが見つければ、それに対して、どのような集団的な活動を取り入れていくのか、そしてその際に、「ブリッジ」になっている子どもにどのような役割を期待すべきなのかといったことは、こうした人間関係の把握ができてはじめて可能になる。

さらに、一定の期間、保育を進めた後で、こうした図を作成し、過去の図と比較を行うことも考えられる。集団構成が時間とともにどのように変化していくのか、そして、それが子どもたちの育ち、発達とどのようなかかわりを持っているのかという重要な課題を検討できる可能性がある。もちろん、保育の効果を検討する、あるいは前述のように次の保育の構想の基礎とすることも可能であろう。

今後の課題

上でも述べたが、幼児の人間関係を保育者の視点のみから把握していることが、一つの限界であり、課題であろう。これは、把握方法の簡便化という目標からやむを得ない部分があるが、結果の信頼性のためには、複数の教員から回答を得る、ビデオ記録などを補助的に使う、幼児自身からデータを得る方法を開発するといったことを今後検討する必要があるかもしれない。

また、人間関係の概要を簡便に把握するために、共行動者をあげるという方法をとっているが、人間関係が子どもひとりひとりに及ぼす影響を検討するためには、質的な検討が必要であろう。その集団（コンポーネント）内で、どんな活動が行われているのか、そこではどんなコミュニケーションがとられているのかといったことは、人間関係を知る上では重要な要素である。人間関

係を簡便に、しかし、出来るだけきめ細やかに把握できる方法の開発が研究および教育にとって、今後必要であろう。

引用文献

- 藤枝静暁・相川 充 (2001). 小学校における学級単位の社会的スキル訓練の効果に関する実験的検討 教育心理学研究, 49, 371-381.
- 井森澄江 (1997). 仲間関係と発達 井上健治・久保ゆかり (編) 子どもの社会的発達 (pp.50-69) 東京大学出版会.
- 金山元春・金山佐喜子・磯部美良・岡村寿代・佐藤正二・佐藤容子 (2011). 幼児用社会的スキル尺度 (保育者評定版) の開発 カウンセリング研究, 44, 216-226.
- 狩野素朗 (1985). コンデンセーション法による大局的集団構造特性の集約 実験社会心理学研究, 24, 111-119.
- 及川智博 (2016). 幼児期における仲間関係に関する研究の動向——個体能力論と関係論の循環の先へ—— 北海道大学大学院教育学研究院紀要, 126, 75-99.
- 高櫻綾子 (2007). 3歳児における親密性の形成過程についての事例的検討 保育学研究, 45, 23-33.
- 利根川彰博・無藤 隆 (2011). 幼稚園の1クラスにおける4歳児の仲間関係進展の事例的検討——社会的能力と仲間関係の重なりとしての3つの発達ライン—— 乳幼児教育研究, 20, 1-11.
- 植村善太郎 (2001). 第15章 学級の規範形成と集団構造 速水敏彦・吉田俊和・伊藤康児 (編) 生きる力をつける教育心理学 (pp.207-218) ナカニシヤ出版.